未来を変えたスクルージ

聖騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未来を変えたスクルージ

【Ｎコード】
Ｎ５３０４ＢＡ

【作者名】
聖騎士

【あらすじ】
沖荒夢滝さん主催「月刊ワード小説賞１月期」参加作品です。
盲目の少女との恋。
２０１０年「覆面企画」に出品した作品です。

「それはもう終わったことだから」
彼女にそう告げられた時、ぼくの高校生活は終わった。高校３年間付き合った彼女は、ぼくの所属していたサッカー部のマネージャーをしていた。部のやつらはみんな彼女を狙っていたけれど、まさか彼女がぼくを選ぶだなんて思ってもみなかった。
ぼくは彼女のことが本当に大好きで、ほとんど毎日メールは送ったし、練習や試合で疲れていても必ず彼女を家まで送って行ったりした。休みの日には動物園や遊園地でデートしたし、浮気なんか考えたこともない。
彼氏としてぼくに問題があったとは思えない。でも彼女はぼくとさよならすることを選んだ。

心に傷を抱えたまま、ぼくは県外の大学に進学した。初めて親元を離れて一人暮らしをすることに不安はあったけれど、それ以上に期待も大きかった。“自由”。その言葉がきらきら輝いて青空の中に吸い込まれていく。
アパートのある場所は大学からは私鉄で３０分ほど離れた場所だった。親からの仕送りが生命線のぼくにとって、おしゃれな外観より家賃を重視するのは仕方のないことだ。せっかく都会に出てきたのだからアルバイトの一つでもしてみたい。中高とサッカーに明け暮れてきたぼくにとって、都会での一人暮らしは心の傷を癒す刺激に満ちあふれている。忘れることはできなくても、日常生活に支障がない程度にはできるんだ。
大学生活は思ったより忙しく、ぼくは毎日へとへとになって部屋に戻る。分不相応の大学に入ったためか、周りの奴らはみな頭が良く、ついていくのに必死だった。
ぼくは昨夜遅くまで、ない頭を絞って今日提出〆切のレポートを

仕上げていたため寝坊してしまった。
「ドアが閉まります。黄色い線の内側までお下がりください。駆け込み乗車はおやめください」
「やばっ！」
ぼくは階段を一段抜かしで駆け下りる。サッカーで鍛えた脚力には自信がある。しかし残念ながらドアは無情にもぼくの目の前で閉まってしまう。
「あっちゃ～、まじかよ」
伸び始めた髪の毛を掻きむしり、ぼくは行ってしまった電車の後ろ姿を見つめて溜息をつく。次の電車だと、降りてから全速力で走っても間に合うかどうかわからない。出席に厳しい教授の講義なだけに、ぼくは憂鬱な気分で次の電車が来る方向を見る。すると一人の女の子が目に入る。ストレートのきれいな黒髪に華奢な手足。黒いディーバックを背負った白いブラウスが春の陽射しにまぶしい。赤いチェックのスカートは高校の制服だろうか。
しかしぼくの目を一番引いたのは、彼女が手に持った白い杖。ある考えに至って彼女の顔を見ると、彼女の目は閉じられていた。
普通階段を下りる時目をつぶって降りる人はいない。手に持った白い杖から考えても、彼女は目が見えないのだろう。彼女は左手を手すりに添え、右手に持った杖で一段一段探りながら下りてくる。そのすぐそばをサラリーマンや学生が忙しそうに掠めていく。みな彼女が盲目だとは気づいてもいないようだ。
「間もなく電車が入ります。黄色い線の内側まで下がってお待ちください」
アナウンスが入ると、乗客は我先に乗り場に並ぶ。ぼくは後ろから押されてふらついてしまう。すると先ほどの彼女も、後ろからきたサラリーマンにぶつかって、よろめくのが見えた。
「危ない！」
ぼくは小さく叫んで列から外れ、彼女の方に向かう。彼女はホームまで残り数段というところで手すりにしがみついて立ち止まって

いる。白い杖はひもで手首からぶら下がっている。バランスを崩した時に放してしまったのだろう。
銀色の電車がホームに滑り込んでくる。より一層人の流れが激しくなる。階段の途中で立ち止まっている彼女の存在は、朝の駅では邪魔者以外の何者でもないらしく後ろからどんどん押されている。ぼくは小走りに階段を駆け上り、彼女の後ろについて壁になる。彼女は石鹸の匂いがした。
「大丈夫ですか？」
彼女はぼくの気配には気づいていたようだが、まさか声をかけられるとは思ってもいなかったのだろう。はっとしたようにぼくを振り返り、小さな声で「はい」と言った。
それが彼女、霧島　雫との出会いだった。

雫とはそれから毎日電車でいっしょに通学するようにした。彼女はぼくの降りる一つ手前の駅にある盲学校の学生だった。年が一つしか違わないこともあり、ぼくたちはすぐに意気投合した。
彼女はなぜ目が見えないのか、ぼくの方から聞くことはしなかった。いや、できなかったと言った方がいいだろう。彼女の方から言い出すまでこういうことは聞くべきじゃない。それに都会に出てきて初めてと言っていいほど胸がときめいていた。目が見えないとか関係なく、雫に惹かれるぼくがいた。それは間違いなく“恋”といっていい感情で、ぼくの生活は確実に雫の存在で彩られていった。
ある時ぼくは勇気を出して彼女をデートに誘ってみた。一週間悩みに悩んだ末、クラシックのコンサートにしてみた。彼女の降りる駅の近くにけっこう大きな芸術ホールがあって、そこにクラシックに疎いぼくでも聞いたことのある世界的に有名なオーケストラが来るらしい。彼女は音楽が好きで、今流行の音楽はもちろん、クラシックも大好きだと会話の中で聞いていた。
「そんな……　チケット高かったんじゃないですか？」
ぼくの差し出したチケットに触れながら、彼女はかわいらしい声

で戸惑いを表す。彼女は目が見えないけれど、声と表情は感情豊かだ。かわいらしい声はいつまでも聞いていたい気がする。
「雫さえよければだけど……」
「すごく嬉しいです」
そう言って彼女は前を向いたまま微笑んでくれた。
その日、ぼくは今までになく気合いを入れておしゃれをした。もちろん彼女に見えるわけはないけれど、クラシックコンサートなんて今まで足を運んだことはない。とりあえずフォーマルにしておけば問題はないだろうということで、ジャケットにコットンパンツという服装にした。駅で彼女を待っていると、遠くから彼女が白いワンピースを着て歩いてくるのが見える。ぼくは嬉しくなって走り出す。彼女はぼくの足音を聞き取って立ち止まる。
「遅くなってごめんなさい、家族以外の人と出かけるのって初めてでいろいろと手間取ってしまいました」
ぼくはそんな彼女の手を取って歩き出す。デートの時、相手に歩調を合わせて歩いたのは初めてだった。それは不思議と心地よいことに気づいた。

「今日は本当にありがとうございました」
コンサートはぼくにとっては眠気との戦いだったけれど、彼女はとても感動したらしい。指揮者がどうとか作曲者がどうとか彼女は一生懸命話してくれたが、ぼくはその話の中身より彼女のそんな無邪気さが愛しくてたまらなかった。
「あの、よければぼくと付き合ってもらえませんか？」
駅で別れる時、ぼくは溢れる想いを我慢しきれず口に出した。彼女は驚いて動きを止めたあと、困ったようにうつむく。しまった早すぎたか、と思ったけど言ってしまったものはしょうがない。ぼくは気持ちを伝えたくて彼女の手を握る。彼女の手は冷たくすべすべしていた。
「こんなわたしでいいんですか？」

消え入りそうなくらい小さい声で、彼女はそう言った。駅の隣りにある小さな公園では、だれもいないベンチが寂しそうに外灯に照らされている。フェンスの向こうを私鉄が轟音を立てながら通り過ぎる。タクシーとバスの排気ガスの中、ぼくは彼女を抱きしめる。

この日、雫はぼくの彼女になった。

それからぼくと雫は毎日待ち合わせをして学校へ行くようになった。ぼくは講義のない日も、雫に会うために朝の電車に乗った。雫の笑顔はぼくにとってかけがえのないものだ。目が見えなくてもぼくと雫との間にはなんの問題もなかった。ぼくは常に雫をエスコートし、不自由さを感じさせないようにした。盲目だということをコンプレックスに感じてほしくなかったからだ。

夏にはいっしょに海へ行った。さすがに入るのは怖がったけれど、雫の水着姿はとてもかわいらしく、ぼくは何枚もいっしょに写真を撮った。

秋は日帰りで温泉旅行に行った。雫は両親にぼくとつきあっていることを話してあり、彼女の両親は旅行を快く認めてくれた。ぼくとつきあうようになってから、雫が明るくなったと喜んでくれているようだった。その後何度か雫の家にも遊びに行き、ご両親とも親しくなれた。

彼女は将来盲学校の先生になりたいという夢を持っていた。ぼくもその夢には大賛成だったし、心から応援したいと思っていた。ぼくはまだ将来のことなんか考えもできなかったけれど、今は雫とずっといっしょにいることがぼくの夢だった。

つきあい始めてから最初の冬、町にジングルベルが聞こえ始める時節、ぼくらは木枯らしに身をすくめながら街を歩いていた。冬物のコートを雫が買いたいと言っていたので、郊外にある大型ショッピングセンターに買い物に行ってきたのだ。

白いミトンの手袋に包まれた雫の細い手を握り、ぼくらはいつも

のように歩いていた。そう、いつものように歩いていたんだ。
「ねえ」
雫の声は木枯らしよりも冷たい。立ち止まった彼女の身体は、鉛のように重かった。ぼくは何となく胸騒ぎがして、つないだ手を握りしめる。雫はうつむいたまま動かない。ぼくたちの横をカップルたちが通りすぎていく。みな笑顔で幸せそうだ。
「わたしたち少し距離を置いた方がいいと思うの」
それは突然の言葉だった。けれどぼくにとっては突然の言葉でも、雫にとってはずっと言えずにいた言葉だったんだ。
「どうして……」
正直、最近雫が今のような暗い表情で何か考え事をしているのには気づいていた。それは学校や勉強、将来についての悩み事だと思っていた。理由を聞いても「ううん、なんでもない」で終わっていたから。
「わたしはあなたが大好きです。でもあなたはわたしを好きじゃない」
ぼくは唖然となってしまう。ぼくは雫が大好きだ。それは紛れもない事実で、当の本人であるぼく自身がよくわかっている。それなのにどうして彼女はそんなことを言うのだろうか。ぼくの頭の中は混乱して何も言えなくなってしまう。呆然と見つめるぼくの手を雫はそっと放す。彼女のぬくもりが消えると、ぼくははっと我に返る。
「ど、どうして？　ぼくは雫が大好きだよ？　誰よりも一番きみが好きだ」
「あなたは『好き』の意味をわかっていないわ」
「え……」
「さよなら」
雫はそう言うと白杖を動かしながら歩いて行ってしまう。吹きつける木枯らしがぼくの心の中まで入り込んで、ぼくは全身が麻痺したようにその場を動くことができなかった。
雫と会わなくなって二週間が過ぎた。街は気が狂ったようにクリ

スマスムード真っ盛りだ。赤と緑の乱舞する夜の街を歩くと、無性に寒さが募ってくる。ぼくは雫に言われたことをずっと考えていた。

「好き」の意味。

雫の笑顔をいつも見ていたい。目の見えない雫の支えになってあげたい。ずっとそばにいてあげたい。雫の声が聞きたい。ぬくもりを感じたい。それは「好き」とは違うのだろうか。辞書を引いてもネットで調べても、どこにも答えは載っていない。ましてや他人に聞くようなことでもない。またこの繰り返しだ。高校の時別れた彼女もいつの間にかぼくから心が離れていってしまった。いったいぼくの何が悪かったのだろう。

いくら考えてもぼくの頭の中ではクエスチョンマークが渦巻くばかりで、答えどころかヒントさえ浮かんでこない。このまま終わってしまうのだろうか。ぼくは一生こうやって悩み続けていかなければいけないのだろうか。自問自答を繰り返しながら無味乾燥な毎日を送る。大学が長期休暇に入って友人たちが帰省していく中、ぼくは部屋に閉じこもってくよくよしていた。

そんな時、ふと思い出した。雫の盲学校はミッション系で、冬休みに入る前に発表会がある。雫は劇をしたり賛美歌を歌ったりすると言っていた。もう一度雫に会いたい。このまま終わってしまうのは嫌だ。

12月24日、ぼくは雫の学校へ来ていた。雪こそ降ってはいなかったけれど乾いた木枯らしが吹く中、『クリスマスコンサート』の看板が校門に立てかけてある。初めてきた学校は勝手がわからない。順路に従って体育館まで行くと、そこが会場らしかった。

ほとんどが生徒の保護者か関係者なのだろう。ぼくは何となく居心地が悪くって隅っこの方へ隠れるようにして座った。シートの敷かれた床にパイプイスがたくさん並んでいる。思ったより観客は多く、百人はいるだろうか。

しばらく所在なげに座っていると照明が落とされ、コンサートが

始まる。演技は初等部から始まるようで、合唱や器楽合奏などがかわいらしく進んでいく。盲学校だけにどんな感じになるのかと思っていたが、普通の子たちと何ら変わりはない。いや、ヘタをしたら一生懸命やっている分、今のスレた子どもたちよりよほど上手いかもしれない。

中等部が終わった後、高等部による劇の番が来た。劇はイギリスの有名なお話『クリスマスキャロル』だった。

劇は進み、いよいよ精霊の登場となる。生徒たちの熱心な演技にほだされ、ぼくは食い入るように見入ってしまう。

主人公のスクルージ役は男子生徒だったが、とても目が見えないとは思えないほどの演技でびっくりした。舞台上をかなり動くのだが、落ちたり大道具にぶつかったりすることもない。相当練習したんだろうことは想像に難くない。そしていよいよクライマックス。三人の精霊が出てくる場面だ。

過去の精霊、現在の精霊と話は進み、未来の精霊が出てきた時、ぼくは身体が硬直した。雫だ！　雫は未来の精霊役だったようだ。

雫は不気味なメイクを施し、低い声でスクルージの恐ろしい未来を見せる。それはまさに鬼気迫る演技で、とても学校の発表会レベルの演技とは思えない。

「雫……」

雫はとても生き生きしているように見えた。それはぼくの知る大人しく引っ込み思案の女の子ではなかった。

「そなたの傲慢さをよく知るがいい！」

雫がスクルージへ宣言する。ぼくは心がえぐり取られる気がした。

その時ぼくは自分の傲慢さに気づいた。ぼくは雫に対して傲慢だった。いや、高校時代の彼女に対してもそうだったのだろう。「あんなにデートしてあげたのに」「あんなにプレゼントをあげたのに」「こんなに好きなのに」……　どれも自分勝手で相手のことを考えてはいない。

雫に対してもそうだ。ぼくは彼女が盲目だからといって下に見て

いなかったか？　障害を持っている弱い人間だと、心の中で同情していなかったか？　雫は盲目だということを、始めからコンプレックスになんか感じてなかったんだ。雫の目は確かに見えないけれど、ぼくの目よりよほど多くのものが見えていたんだ。

ステージでは最後の出し物である全校生による賛美歌が歌われている。荘厳なその調べは、ぼくの未熟な心を洗い流すかのように清廉で美しかった。ぼくはいつの間にか涙を流していた。ぼくの薄っぺらい言葉、雫の笑顔、いろいろなことが浮かんでは消えていく。発表会が終わって会場の人たちが帰り始めても、ぼくは席を立つことができなかった。

外灯の白い光がぼくの影をおぼろげに揺らす。とぼとぼと歩くぼくの影は、まるでぼく自身の存在をおぼろげなものに思わせる。駅に向かう人気のない道を歩いていると、軽自動車がぼくを追い越して、黄色いウィンカーを点滅させながら交差点を曲がっていく。

雫の言った言葉。「好き」の意味。雫の言う通りだった。ぼくは何もわかっていなかった。「好き」の意味も雫のこともぼく自身のことも。すべては一人よがりで自分勝手。ぼくは最低なやつだった。雫に嫌われても当然だ。目が見えないなんて、人間にとって個性の一つにすぎない。障害なんて障害のない者が考え出した差別でしかない。雫にとってぼくは障害者を差別するやつらと、なんら変わりのない存在でしかなかったんだ。

お店から流れるジングルベルを聞きながら、ぼくはコートに首をすくめる。実家に帰ろう。そしてしっかり自分を見つめ直そう。雫のことはちゃんと忘れよう。ぼくにできることはもう、雫の幸せを陰ながら祈ることだけだ。傲慢なスクルージは、悲惨な未来に恐れおののきながら自分を振り返る。それは今までしてきたことの罰なのかもしれない。

駅の手前にある小さな公園を通りかかる。思えばここで雫に告白したんだっけ。ぼくは何気なくベンチを見る。そこにはあの時いっ

しょに選んだ白いロングコートに身を包んだ雫が、一人ぽつんと座っている。
「雫……」
ぼくは心臓が止まるかと思った。なぜこんなところに雫が一人でいるのだろう。とっくに親と帰ったはずなのに。
ぼくは立ちすくんだまま動けなくなってしまう。すると雫は静かに立ち上がり、白杖を動かしながらこっちへ歩いて来る。まるでぼくのことが見えているかのように。雫はそのままぼくの前に立ち、目をつぶったままの顔を上げる。
「来てくれてありがとう」
「どうしてここにいるの？」
ぼくは遠くに自分の声を聞く。雫とこうしてまた話ができるなんて思ってもみなかった。声が震えているのがわかる。
「さっき見かけたって、お父さんが」
見ると駅の駐車場に軽自動車が停まっている。さっきぼくを追い越して行った車だ。
「ごめん！」
ぼくはあふれ出す想いを堪えきれず、頭を下げる。雫が息を飲んで一歩下がる気配を感じる。
「ぼくはきみのことをちゃんとわかってなかった。目が見えないからぼくが目の代わりになろうとか支えてあげようとか……　傲慢だった」
頭を下げながら話すぼくの言葉を、雫はちゃんと聞いてくれているようだった。
「雫の言う通りだった。ぼくは『好き』ってこと、ちゃんとわかってなかった。わかってるつもりになってただけなんだ！」
雫の気配が感じられない。もしかしたらうんざりして行ってしまったのかもしれない。でもぼくにはそんなの関係ない。雫が聞いていようがいまいが、きちんと最後まで言おう。
「きみが未来の精霊をやってる姿を見て気づいたんだ。ぼくは雫に

対して、いや今までずっと自分勝手だった。人をちゃんと見ないで、自分の考えだけでそれが正しいって思い込んでた。だから……」
「もういいわ」
ぼくの頭を柔らかいぬくもりが包み込む。ぼくはいつの間にか雫の胸に抱きしめられていた。
「雫……」
ぼくは流れる涙を見られたくなくて、そのまま雫を抱きしめる。いい匂いがする。雫の匂いだ。香水なんかじゃなく初めて出会った時と同じ石鹸の匂いがぼくを包み込む。
「もう一度ぼくと付き合ってくれるの？」
「ええ？」
ぼくの頭を撫でていた雫の手が一瞬止まる。けれどもまた優しく撫で始める。そういえばこんなことされたことはなかった。いつもぼくが保護者面して撫でる側だったっけ。
「あなたとは別れたつもりはなかったんだけど……　距離を置こうって言っただけよ」
「あ……」
ぼくは呆気に取られてしまう。そうだ、確かに雫はそう言った。ぼくはパニックになって、勝手に別れを切り出されたものと思い込んでた。
「自分がこんなにばかだと思ったの、生まれて初めてかもしれない」
「ふふっ」
雫は僕から離れ、ミトンの手袋を外す。雫の暖かい指が頬に触れ、ぼくの涙を拭ってくれる。雫には全部お見通しのようだ。
「なに？」
「未来を知ったスクルージはね？　それが“変えられる未来”だということを知るのよ」
「変えられる……　未来？」
雫はぼくの手を握る。そして明るい駅の方へ向かって歩き出す。
「わたしの目は先天的な病気だけど、医学がもう少し進めば角膜移

植で治るかもしれないって」
雫はぼくなんかよりずっと、はっきりと未来を見据えている。
「わたしたちの未来はこれからよ」
雫に手を引かれたぼくは、間違いなく未来を変えることのできたスクルージそのものだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5304ba/

未来を変えたスクルージ

2012年1月14日18時48分発行